

川端康成「白い満月」論

— 憧れる「健康」、排除される差異 —

一、はじめに

「白い満月」は、一九二五年一二月の『新小説』に発表された川端康成の初期小説である。この作品は、川端康成の聖書や「心霊学」⁽¹⁾の受容という文脈において言及されることが多く、作家の思想を反映する創作であると理解されていた。数少ない先行研究の中では、作中のテレパシーや遠隔透視のモチーフが強調され、川端自身が主張していた「万物一如・輪廻転生」という考え方と結びつけて解釈される傾向が強い。⁽³⁾

「白い満月」を「心霊学」的なテキストとして解釈する枠組みが形成されたのは、後年の代表作である「抒情歌」(一九三二・二)に対する評価が大きく影響している。「心霊学」に関する文献から豊富な引用を行い、ときにはその引用した内容を自在に書き直す「抒情歌」の物語の中から、「異界」への「転生」という救いを見出

馮 思 途

す先行研究の視座においては、類似のモチーフを取り入れている「白い満月」もまた、「異相」を捉える小説に分類されているのである。⁽⁵⁾

しかし、川端康成の思想の内実を過度に探ったり、作品の幻想性を単純に強調したりするあまり、「白い満月」の物語内容への考察が軽視されてきたことは否めない。一人称の語りを主軸に展開される本作では、主人公の「私」と二人の妹との家族関係の複雑な様相も描かれている。家族との関係性に葛藤する「私」のあり方を踏まえるならば、「心霊学」の文脈に収斂され得ない「白い満月」の物語内容の特徴に気付かされるだろう。

本稿では、「白い満月」を「家」という観点から再検討し、今までの印象論的な評価によって見過ごされてきた作中の物語の論理と構造を説明することを目的とする。「白い満月」のストーリーを仔細に読み解くことにより、血縁的な家族関係に囚われ懊悩する「私」が、幻想的な世界に引きこもっていくようになる過程に注目して考

察を行う。以上の分析を踏まえ、「白い満月」の中で構築されている幻想性に潜む問題を指摘し、川端康成の他の初期作品との関連を視野に入れて、このテキストの位置付けを改めて呈示する。

二、「貧血」の身体、「孤独」のアウトサイダー

「白い満月」の主人公である「私」は、「肺病」を患い、実家のある東京から遠く離れた温泉地で七ヶ月間療養生活を送っている。

「私」が湯治をしている滞在地は、「山々」に囲まれている「谷間」であり、避暑のシーズン以外には人出の少ない、閑寂な場所である。六間の部屋で一人暮らしをする「私」は、ウィルスの感染力を極度に恐れているため、下の妹・静江に毎月の仕送りを送ってもらうほかには、外界との接触を避けて、「孤独」な自粛生活を過ごしている。

療養先の「谷間」という地理的な閉鎖性による制限に留まらず、「私」の「孤独」が自身の身体性と結びつけられて表現されていることが注目に値する。朝晩の温泉の入浴を楽しんでいる「私」は、お湯から上がると必ず「軽い目まひ」に襲われ、「谷川の向うの杉林を見る眼に距離の感じがなくなってしまう、姿見の中の自分の姿が消えてしまふ」という特異な身体感覚を体験する。入浴によって引き起こされている「熱」のため、「私」は自分の「不健康」を痛感し、「貧血」に悩まされている気持ちの次に述べている。

毎月きまつて三四日づつ私はこの貧血におびやかされるのである。たとへば、うつむいて路を歩いてゐる。ふと眼を上げる。薄曇りの夕暮のやうな気がする。山々と自分の眼との間の連絡が妙に失はれてゐて、遠い山と近い山との区別がなくなり、風景が空気のない世界で静まり返つてゐるやうに見える。はつきり眺めようとして瞬くと、瞼が疲れてゐて寒い。私はしをしようつむいて憂鬱と孤独を感じる。

「遠い山と近い山との区別がなくな」という記述が示しているように、「貧血」による体調不良に見舞われるときの「私」は、遠近感を喪失し、正確な距離感覚を保つことができなくなっている。「私」にとって「貧血」とは、「周期的」に迫ってくる脅威であり、自分自身の存在の基盤を激しく揺さぶる身体の「変調」なのである。「風景が空気のない世界で静まり返つてゐる」という平板化された視界の中で、「私」は感覚の歪みによって周囲と寸断されて疎外感を味わい、深い「孤独」に沈んでいる。

「私」のこうしたアウトサイダー的な気質は、「肺病」による病状が原因となつて形成されているが、このような病に冒された身体性が、家族との関係性に淵源していることを見逃してはならない。「肺病」で亡くなった父親を持つ「私」は、この父親から虚弱な体質を受け継いでいると自覚している。普段は「神経質」に消毒を行い、行き届いた感染症対策を行なっていたにもかかわらず、自分が「肺

病」に感染したことについて、「落ちるべきところに落ちてはつとした」と感じており、父親譲りの体質がもたらした宿命的な結果であると理解している。さらに、「私の貧血の徴候は毎月静江の手紙が来る時分にきまつて現れる」と語られているように、静江からの来信に触発される「貧血」は、血縁関係を意識することによって「規則的」に起こることが強調されている。「静江にも、静江が送つてくれる金にも、私の不吉な空想を誘ふやうな原因が潜んでゐる」と匂わせる「私」は、仕送りを受け取るたびに「ぼんやりしてゐる父母や妹達の姿」を否応なく想起させられ、「不健全な心の動揺」を禁じ得ないのである。

しかし、「私」の「貧血」の症状のあり方は、お夏という一七歳の地元に住む娘をお手伝いとして雇い入れ、共同生活を営むことをきっかけに、明らかな変化を見せている。家族の事情に長らく煩わされている「私」は、お夏と初めて対面した際、彼女の特徴を「家の枠組みの中で捉えている」。

姉の眼は澄んでゐるが、妹の眼は濁つてゐる。妹の眼は彼女が父から受けたらしい悪い遺伝を感じさせる。母は死んでゐる。姉嬢は村の桶屋へ嫁入りしてゐる。父は北海道の山へ出稼ぎに行つてゐる。私が妹嬢を雇い入れたのは五月だった。五月にこの娘は少し耳が遠くなる。夏はよく聞えて九月の末にまた少し悪くなるのださうだ。

引用した箇所から分かるように、お夏の家族は離散し、お夏もまた単身で、住み込みの仕事を転々としている。父親の「悪い遺伝」を受け継いだために目が濁り、耳がよく聞こえないために、時折周囲の物音や声を「変に」聞き取っている。このように、彼女を取り巻く事物との正常な繋がりを作ることが困難であるかのように見えるお夏の「病的」な様子に、焦点が当てられているのである。「私」からすれば、お夏もまた血縁関係に由来する身体機能の異常性に悩まされ、自分と同様の疎外感を感じているはずだと考えているのである。

しかし、お夏と雑談しているうちに、「私」は、彼女が見ず知らずの人と同じ速さで本を読む能力を持つことに気づく。お夏の能力を試すために、「私」は手元の「翻訳書」を読み出したが、「私」の意識と通じあうかのように、お夏もページを捲つて同時に読み進んでいくのである。お夏自身は、他人の考えを窺い知れるわけではないと否定しているものの、周囲との断絶感に晒されている「私」とは対照的に、お夏は「以心伝心」を実現し、世界との独特な繋がりを構築し得る人物として造形されている。お夏と触れ合うことで、人間関係における「温味」を久々に体感したという「私」の反応が示すように、お夏の能力は、「私」の疎外感を払拭し、安定した体調と精神状態をもたらすのである。

「一人の人間は清らかな空気よりも良薬だった」という感想を抱

く「私」は、お夏を頼りに「健康」を取り戻し、快方に向かう。だが、静江の送金が途切れているのに気づいたことを境に、「私」は再び動揺し始める。これに加えて、上の妹・八重子が突然、「私」を訪れる。「不幸の使者の黒い鴉」を自認し、「御主君の御使ひで来た」と戯れる八重子の言葉を踏まえると、「私」が一家の財産を管理している静江からの仕送りを受け取れなかったことの背後には、「家」に関する何らかの問題が生じた可能性を想像することができると言えれば、八重子の「不意」な来訪が、「私」の忌避する「家」の事情を改めて想起させ、自身の家族関係に直面せざるを得ない状況を露わにするのである。

三、疑われる「家」、嫉妬される「健康」

第二節では、「私」を中心に、作中の各登場人物たちの関係を整理し、「白い満月」の物語の背景および設定を確認してきた。八重子が来訪したため、お夏が二人分の食事の支度を整えに行った後、「私」は八重子に誘われ、村を散策する。静江と海遊びをした際に、「海岸」で不具合が生じていたと彼女からすでに仄めかされていた「私」は、八重子からさらなる詳細を引き出そうとする。だが、八重子はお夏の「乱暴」な言動を評して、「山の娘」で「嘘はつけない」という純朴な性質に感心し、そこからさらに静江の誠実さを連想するという風に、次々と話題を転じていく。肝心の「海岸の問題」に

ついて一言も触れない八重子に対し、「私」は「はつきり」とした説明を行うように要求するが、八重子は、静江が「女としては生きてゐられない侮辱を受けた」という意味のはつきりしない返答しか寄越さない。曖昧な態度を取る八重子を目の前にする「私」は、「一個の存在に對して敬意を払はれなかつた」という彼女の「口癖」を持ち出し、そのはつきりしない話し方をからかっている。

八重子の「口癖」を思い起こしたことをきっかけに、「私」は彼女の人格や性格について考えを巡らせる。「一個の存在として敬意を払はれる」ことを生活の「信条」とする八重子はまた、「絶対の自由」を重んじている。ただ、八重子の「口癖」の意味が不明確であるため、「私」は「一個の存在に對する敬意」という「信条」に込められる「絶対の自由」の内実を捉えきれない。「彼女の連想を束縛することもその飛躍に調子を合せることも出来ない」と語られるように、「私」にとって八重子は絶え間なく変化し、謎めいている。八重子と「しみじみ」と話し合って「一つになりたい」という「欲望」に突き動かされながらも、「私」の「欲望」は常に彼女の「気まぐれ」な言動に裏切られ失敗に終わってしまう。こうした八重子の言動を「人間の力で分る以上に」説明しようとする「私」の衝動は、八重子と静江という二人の妹が、そもそも「私」の父親の子供であるか否かという彼女らの出自への疑いによって生じたものなのである。

八重子や静江の出自に向けられる「私」の疑念について理解する

ためには、その「家」の背景を掘り下げて考察する必要がある。織物の産地として「名高い田舎で代々相当な暮らしを立てて」いた「私」の「家」は、家系の連続性を重視する地方の旧家である。だが、「私」の父親は、東京へ遊学した際、「肺病」に罹患した上、「田舎の伝統」から「敵視」されるような「素性の分らない都会の女」を「妻」として連れて帰ってきたのである。「田舎」を軽蔑する「私」の母親が、父親と東京に出て呉服店を開いてから「私」を授かり、その後は病弱な父親の療養のため、夫婦は長らく別居することになる。「男まさり」な母親は、呉服店を繁盛させたのみならず、八重子と静江を相次いで産み、三人の子供を自力で養育した。父親が長期的に「家」に不在であった時期に、八重子と静江が産まれたという事実を踏まえると、二人の妹と「私」の父親の間に血縁関係が存在しないことが推測できよう。「正しい父の子であるといふ祝福と呪詛とのしるしとして、父の体質を私だけが受継いでゐる」と「私」が自嘲するように、「私」は妹達と異なる生物学的な特徴を持つことを理由に、二人の出自を絶えず疑問視するのである。

「私」は、自分の財産相続の権利を八重子に譲渡し、自身と彼女が父親を同じくするかについて探ろうとしたことがある。「私」の提案を聞いた八重子は、「恥辱」を感じて顔色を変え、血縁の繋がりが「どうでもいい」「星の世界のこと」だと主張する。「私」が血筋の純粋性に拘泥していると懸念する八重子は、女学生時代にダリアの花の根を友人に贈った時の記憶を、「私」に話して聞かせる。

「ダリアに花が咲いても、その花は私のダリアの花の妹だなどと知りもしなければ思ひもしない」という感傷的な手紙を友人に書き送った八重子は、彼女から、「私は去年の夏よりもつとつと真実なあなたの妹です」という返事を受け取る。ダリアの花を媒介に、友達と擬似的な姉妹関係を築いた当時の八重子は、そのシスターフッド的な関係性に「幸福」を感じ取っていたが、現在から振り返ってみると、女学生の間のごっこ遊びに過ぎない、滑稽な「騒ぎ」であったと看破している。

かつて姉妹を模倣する「女学生風」の行為に興じたことのある八重子にとっては、家族関係の象徴秩序は、生殖や血縁の有無にかかわらず、人為的に構築され得るものであることは明白である。したがって、自身の父母の間に起きたかもしれない生殖のトラブルを「天上の問題」と看做し、親と子供の間には生物学的な関係性があるか否かを特に問題にしない八重子は、血縁に基づいた家族関係を自明視していない。このような八重子の家族の捉え方に接し、「私」は次のように応接している。

その女学生風な考へといふやつに、僕がこだはつてゐると思つてくれば困る。お前と僕とが兄と妹であることのために暗い影が附纏ふといふのなら、きやうだいであると考へる必要は少しもないんだ。死んだ親の問題なんか解決するつもりはないんだ。また、財産を誰の手に渡したところで、そんなことで解決

出来るとは思へないが、お母さんを疑つてゐると言はれるとぐうの音も出ない。

引用箇所からも読み取れるように、「私」は、血縁的な家族関係を模倣することに執着する「女学生風な考へ」に縛られて、父親と妹達との血縁的な関係の真正性を詮索しているわけではない。「兄と妹であることのために暗い影が附纏ふといふのなら、きやうだいであると考へる必要は少しもない」と表明されるように、兄妹と規定された関係の下で、「私」と八重子の中に不条理な状況が生じた場合、「私」は家族の秩序を乗り越え、八重子と別種の関係性を模索しようとする意志を示している。

妹達の出自に抱いている「私」の疑惑は、強固な血縁関係を土台に形成されてきた従来の家族の秩序を維持しようとするところに由来するわけではない。二人の妹と父親との血縁関係の有無が怪しまれている中で、「私」は、妹という象徴的な自明性を喪失し、不可解な他者となった八重子と静江と新たな関係を築き上げることで、既存の家族関係を変革する可能性を見出している。「父と母とを結びつけて考へなくとも、妻と夫とを縛りつけて考へなくとも、母には母の喜びがあつた」と語られるように、「私」は「母」、「妻」という「家」の枠組みの中でジェンダー化されている役割を相対化し、母親が引き起こした生殖のトラブルが産み落とした八重子および静江の存在を、血縁的な連続性を信奉する「家」の規範を攪乱する差

異として積極的に捉えているのである。

しかし、一方では、病弱な身体を持ち主である「私」は、妹達の「健康」を嫉妬している。「孤独」な療養生活を送る「私」は、「貧血」からもたらされる疎外的な状況を改善し、心身の安定を回復させたいと強く願っている。「妹たちの姿を通して、母の生の喜びを、汚れを洗ひつくした後の清らかな感じで感じた」と表現されるように、「汚れ」を忌避する「私」は、「清らか」さを志向し、母親の「生の喜び」や「妹達の美しい健康」を、安定的な「生活力」を保つ前提として羨望していることが窺える。「健康」に基づく「生活力」を希求する「私」は、父親譲りの病弱さや、ウィルスに冒された身体を嫌悪するのみならず、秩序攪乱的な存在である八重子をも、「気まぐれ者」と看做して、拒絶するようになる。

「私」の拒絶反応は、八重子と「海岸の問題」について議論している際に、顕著に現れる。八重子の顔を「風車のやうに回転してゐる白い花環」に喩え、「華やかで捉へにくい」彼女の表情に苛立つ「私」は、静江が遭遇した「事件」について改めて質問する。「兄さんの想像外のこと」と有耶無耶にしようとする八重子を何度も問い質し、静江をめぐる二人の男が「決闘」を行ったという真相をようやく聞き出すことに成功する。「決闘」という言葉に驚いた「私」は、死傷者の有無や静江の安否を確認するが、八重子は、ピストルを「一発撃つただけで涙を流して握手」した二人の男の意気地なさ

に憤り、速やかな和解によってあっけなく終わりを迎えた「決闘」

の結果を残念がるのである。さらに、「男にすまない」と気が咎め、「修道院へ行きたい」という静江の様子を目の当たりにした八重子は激昂し、「決闘」の当事者の一人である静江の夫に「離縁」を通知し、彼らの婚姻関係を勝手に解消してしまったのである。

「決闘」の一部始終を知った後も、「私」はなお、静江を中心に起きていた「三角関係の模様」に関する疑問を禁じ得ない。静江の現在の夫が八重子の元恋人であることを知る「私」は、今回の「決闘騒ぎ」も、むしろ八重子の恋愛に起因する出来事であるのではないかと推察し、静江の夫と「決闘」した相手のことを「よく知つてゐるのか」と、八重子に厳しく問うている。「私」の詰問に、八重子は「ぎぐつとし」、「顔の表情を白壁のやうにぴたりと静め」、その男とはあくまでも顔見知り程度の関係でしかないと返事する。八重子の反応が示唆するように、「私」の推測はある程度、的中しているようである。「彼との恋愛を書損つた恋文の反故のやうに紙屑籠へ、妹の静江の上へ投捨ててしまつた」と捉えられているように、「私」は八重子に真相を告白させることは叶わなかったが、静江の以前の結婚も、今度の「決闘騒ぎ」も、「生活する力がない」八重子の招いた恋愛関係の混乱を収める後始末であつたと認識している。「水底の岩のやうに動かない存在」であり、結婚という「形式」で「恋愛を固め」る静江と異なり、「絶対自由主義」に従う八重子は、恋人を次々に変え、「生活力に亀裂が出来た気まぐれのもの」であると否定的に捉えられている。二人の名前が象徴的に示す通り、「貞

操」に従順な静江の不変性とは正反対に、八重子は結婚における性に関する道徳を無視して「自由」に行動し、秩序の規範を脱臼させていくラディカルな存在なのである。「私」は、血縁に基づいた家族関係を信用しない八重子の特異性を通じて、家族関係の秩序を作り替え、「家」の存在によって生じた苦悩から脱却する契機を肯定的に引き出そうとする。だが同時に、「健康」に憧れ、「生活力」を重視する「私」は、八重子の特異性を、療養生活の安定的な秩序を紊乱する危険な力と見做し、排除しようとするのである。

第三節では、八重子の来訪によって顕在化した「家」の事情を明らかにし、二人の妹の存在、特に八重子に対する「私」の両義的な感情を分析した。次節では、心身の落ち着きを失った「私」の変化を踏まえ、八重子に掻き乱された療養生活の安定を回復させるために、「私」がお夏を経由して水のイメージを作り出すプロセスに焦点を当て、幻想的な「海」の創出によって「健康」の秩序を再建する「私」の論理を説明していく。

四、流動する「川」、包摂する「海」

八重子が訪れてきて以降、「無我の境地に遊ぶ」気分を奪われた「私」は、激しい焦燥感に駆られ、精神の集中を乱されることになる。ある日、「私」が釣りに出かけたところ、お夏が「癲癇」を起こして卒倒したことを八重子に知らされる。命に別条はなかったものの、

お夏は「黙り込ん」で休暇を取り、卒倒するまでの経緯については何も話さない。その後、夕食を用意するために八重子がその場を立ち去り、「私」と二人きりになったお夏は、北海道まで出稼ぎに行った父親が亡くなる場面を幻視したことを、「言ひにくさうに」話し始める。

「父は樵夫をしてゐるのですが、筏から川へ落ちるところを私見たんです。さつきです。私が気を失つて倒れる時です。」／「見たつて？」／「さつきお湯から上つて前の谷川を眺めてゐると、その川が大変広い川に見えるんです。同じやうな高さの木が岸に頭を揃へてゐましてね。筏が流れて来て父が乗つてゐます。私が大きな声で呼ぶと、父が走つて来て水の中へ足を踏みはづしてしまつたんです。」（／）は改行を示し、以下同様）

お夏は、八重子と入浴して涼んでいた時、目の前の「谷川」が「大変広い川」に見えたかと思うと、北海道で木樵をする父親が筏に乗って「川」を流れて来、彼女が咄嗟に父親に「大きな声」で呼びかけると、父親が筏を踏み外して落水するという情景を目の当たりにしたものである。この話を聞いて驚いた「私」は、温泉に入つたお夏が「水癩癩」の発作で幻視に襲われたのだと思ひ、彼女の父親は無事だと慰めの言葉を与えているが、お夏は父親を「ありありと」見たのだと言い張り、自分が父親を転落死に追い込んだかもしれ

れないと言う。

ただ、「涙一滴流さずに話して」というお夏の様子から明らかであるように、彼女は「十年」会っていない父親の遭難の真偽を、さほど気に掛けておらず、「電報で問合せてみたらいい」と「私」がアドバイスをしても、父親の安否を実際に確かめることはしない。「心を閉じた目つき」をして自分の体験に無関心であるお夏とは対照的に、「私」はお夏の幻視が生じたときの様子を熱心に聞き出し、彼女が「霊的現象」を経験したと確信する。お夏と初めて対面した日に、「私」が「翻訳書」を読むのと同じ速度で、彼女もまた「翻訳書」を読み進めたことを改めて思い起こすと、「私」は、お夏が「以心伝心」の能力によって、遠方の父親の意識に呼応していたのではないかと考えるのである。

お夏による幻視の情景を伝える叙述では、「川」という場所の印象的な役割が強調されている点に注目する必要がある。なぜなら、「遠くの川に起つた父の死を透視した」という箇所からも明らかに、あるように、「私」は、お夏による遠隔透視の現象を理解する際に、「川」の媒介的な作用を重視し、彼女の「以心伝心」の能力を、流動的な「川」によって具象化しようとしているからである。さらに、「父親は自分を見て川に落ちた」というお夏の体験を共有した「私」は、彼女の身に起こった「霊的現象」を身体化するかのようには、「霧」が湧いた「谷間」を囲む「山々」を、「遠い海」として幻視するようになる。「月に引つぱられて膨らんでゐる海面の幻」の中に「広々

と流れる何物かを感覚してゐた」と語られるように、「私」は「靄」や月光に包まれる穏やかな「山々」を、広大無辺の「海」に見立て、流動的な水のイメージを喚起することを通じて、自らの「海」の幻想の中に「山々」を包摂しようとする。お夏を雇い入れる前に、「周期的」な「貧血」に煩わされていた「私」は、「谷間」の閉鎖性によって増幅された疎外感に苛まれていた。しかし、お夏の「霊的現象」を経由した「私」は、「山々」との精神的な繋がりを実感するようになったのではなく、閉塞した「谷間」を開放的な「海」であるかのように想像することによって、世界と自身との断絶を修復しようとするのである。

言うまでもなく、「私」の想像的な「海」は、水の流動性とお夏とをリンクすることで生み出されている。そもそも、「私」が滞在する温泉地は、「湯の量が多く」、「河鹿」の鳴き声や「谷川の音」がいたるところで聞こえるような場所である。そこは豊富な水資源に恵まれている土地であり、透明な月光に染め上げられる「谷川」は、「清らかな白蛇」のように「生き生きと動き出し」、流れている。「白蛇」という隠喩が象徴的に示すように、月光の「白」が、「川」の流れを喩える「蛇」と結び付けられることで動的な印象を獲得し、白い「満月」と、流動的な「川」および「海」とのイメージの連関が成立するようになる。また、水辺の「蛇」が「弁財天」という女性神の化身とされていることを踏まえると、お夏の「以心伝心」の能力を「川」に重ね合わせて強調する「私」の幻想の基盤には、聖

性と女性性の要素が取り入れられていることが明らかである。「八重子の影が銀色に光る流れの上に長々と伸びてゐる」と語られるように、「私」の療養生活の安定を揺るがす「八重子の影」を浄化するために、広大な「海」が想像的に用意される。換言すれば、お夏との交流によって触発されている「海」の幻想の世界では、「私」の心身の「健康」を脅かす肺病の穢れが宗教的な神聖さによって祓われただけでなく、お夏の「不思議な温かさ」を通じて、八重子の突然の訪れのために動揺する「私」の男性性も回復されるようになったと考えられる。「海」による包摂のおかげで、家族の中の「気まぐれもの」である八重子の登場によって露呈させられた「私」の根底にある亀裂は縫合され、その「健康」を脅かすものはすべて消え去ったかのように示されている。

しかし、八重子によってもたらされた混乱は、「私」の療養生活のリズムに混入しただけではない。八重子の独りよがりな行動によって婚姻関係を解消されてしまった静江は、「復縁」を迫る夫からの手紙が送られてきた翌日に、自殺してしまう。電報で静江の自殺を知らされた「私」は、療養生活の中断を余儀なくされ、八重子と帰京し、静江の葬式を執り行う責任を果たさなければならなくなる。お夏と別れざるを得ない「私」は、療養生活の安定的な秩序を完全に喪失し、静江の死という、八重子が生じさせたさらなる混乱に対処する必要性に迫られる。

二ヶ月後、再び温泉地に戻ってきた「私」は、お夏と再会するこ

とができたが、「見ちがへるほどお痩せになりました」という彼女の言葉からもわかるように、その体調が悪化している。入院先から、「動けるやうになるのを待ちかねて逃出して」きたという「私」は、「目に見えない八重子の力」に恐怖するようになっており、静江の自殺が八重子によって意図的に引き起こされた悲劇であると「妄想」し、八重子の存在を徹底的に悪と見做している。「一人の母を中心とした三人の父と三人の子である私たち父子は目に見えない綱につながれながら奇怪な火の車に乗って走つてゐる」と象徴的に語られるように、「私」は自分の「家」を無限地獄の苦痛に満ちた場所として認識し、「一番多く生きる力」を持つ八重子に嫉妬することによって、兄妹の關係性を強食弱肉の敵対關係へと読み替え、彼女から遠ざかるうとしている。

自分の現状を「三角形の底辺がだんだん縮まるやうに尖つて細くなる」と感じている「私」は、内心の「いらだたしい不安」を抑えるために、お夏の「以心伝心」の「温かさ」を再び求める。お夏の共同生活が再開されたある夜、「私」は彼女の泣き声で目を醒ます。お夏は彼女自身の死を夢見たと説明するが、「私」は、お夏の「夢」の話を、「時間を透視」する「人間の靈魂」の為せるわざだとし、かつて父親の死を「透視」した彼女の体験に重ね合わせて捉えている。「涙に濡れ」て「不思議に清らか」になったお夏の目に魅了される「私」は、「満月を仰いだ」際の彼女の姿を想起し、水の清澄なイメージとお夏とを改めて結びつける。「その時私にまた、遠い

海の幻が見えた」と語られるように、「私」は「広々と流れ」る「海面の幻」から神秘的な包容力を感知し、流動的な水に洗い清められ「健康」を取り戻そうとしているのである。作品の結末では、お夏の肩を抱く「私」は、「静けさの底にあらゆる音が流れるのを聞いてゐる」と書かれている。水のイメージが反復的に強調されていることが示唆しているように、お夏と抱擁する「私」は、「海」によって包摂される自足的な幻想の世界に閉じこもり、八重子によって惹起される「家」の因果から完全に目を背けている。

お夏を経由して創造された「海」の包摂的なイメージは、「私」による語りにも刻み込まれている。すでに確認した通り、全五節からなる「白い満月」は、「私」が「肺病」に感染して以降の約一年にわたる療養生活が背景となっている。そして、お夏と初めて対面した五月の場面を「一」に、彼女と再会した九月末の場面を「五」に配置することにより、作品自体が温泉地を舞台とする物語の自閉的なループ構造によって支えられている。静江の自殺によって温泉地を一時的に立ち去るという形で、空間的な移動が生じているにもかかわらず、作品の物語形式の一貫性が維持されているように見えるのは、こうした循環構造を保証する「私」による語りの効果にほかならない。「私」の語りは、東京での葬式のエピソードを後景へと追いやり、静江の死によって物語に開いたトラウマティックな裂け目を埋め合わせようとする。さらに言えば、「私」の語りが想像的に立ち上げる「海」の包摂的なイメージが、物語を支えるループ

構造を強化しているのである。

しかし、私の憧れる「健康」の秩序を保証する「海」の幻想は、八重子を排除することではか成立しないのではないか。かつての「私」は、八重子が体現する特異性を肯定し、兄妹という血縁的な繋がりと異なる関係性を生成する契機を見出そうとしていた。「私は静江が死んでから後も八重子を少しも憎んでゐない」と吐露されるように、「家」の因果に葛藤する「私」にとって、八重子との対話こそが「私」のジレンマを打開する鍵であり、静江の死を経た後には、八重子を受け入れ、静江への喪の作業を協同して行う選択をすることも可能であつたはずである。だが、心身共に疲弊した「私」は、自閉的な幻想の世界に逃避し、「家」にまつわる不愉快な出来事を否認する。作品のタイトルである「白い満月」が象徴しているのは、「満月」の「白」によって立ち上げられる「海」の包摂的なイメージの中で、「健康」の秩序に自足する「私」の防衛的な身振りそのものである。

五、おわりに

「白い満月」は、二人の妹の出自を疑い、家族関係に悩む「私」の葛藤を描いた作品である。「私」は、家族の秩序を混乱させる八重子の存在を通じて、血縁的な兄妹関係を乗り越え、「家」の枠組みに囚われていない新たな関係性を模索していく意志を持っていた。

だが、「肺病」を患った「私」は、心身の安定した「健康」を確保するために、八重子の特異性を排除し、幻想の世界に逃避する。

ここで、「私」が築き上げる幻想の世界が、「海」のイメージで語られていることに注意を払う必要がある。「海」に包摂され充足した安定感を手に入れた「私」は、八重子に代表される攪乱の力を排除したのみならず、様々な水のイメージを駆使し、「海」の幻想を抒情的に立ち上げる語りの中で、お夏⁽⁶⁾の存在をも美学化している。従来では、川端康成の文学作品に見られる「万物一如・輪廻転生」を象徴するとされる幻想性は、好意的に解釈され、理想的な創作の方法として高く評価されてきた。しかし、「白い満月」の分析を踏まえて川端康成が構築しようとした幻想性を改めて吟味するならば、「万物一如・輪廻転生」と呼ばれているファンタジーの中には、他者への美学化によって、その他者性を漂白する暴力性が潜んでいることがわかる。

「白い満月」に頻出する水のイメージは、この作品の後に書かれた「伊豆の踊子」(一九二六・一―二)において、さらに積極的に用いられるようになっていく。例えば、「伊豆の踊子」の結末のシーン⁽⁷⁾は、次のように幕が閉じられている。

私は非常に素直に言つた。泣いてゐるのを見られても平気だつた。私は何も考へてゐなかつた。／海はいつの間にか暮れたのかも知らずにゐたが、網代や熱海には光があつた。(…)⁽⁸⁾ 何

もかもが一つに融け合つて感じられた。／船室の洋燈が消えてしまった。船に積んだ生魚と潮の匂ひが強くなつた。真暗なかで少年の体温に温まりながら、私は涙を出委せにしてゐた。頭が澄んだ水になつてしまつてゐて、それがぼろぼろ零れ、その後には何も残らないやうな甘い快さだつた。

高等学校の学生である「私」が、旅芸人の一行と別れ、乗船して東京に帰る途中の場面であるが、「海」を始めとする水のイメージに囲まれている「私」の語りが、自分の感ずる「甘い快さ」を執拗に立ち上げようとしていることを読み取れる。詳細は別稿に譲るが、「海」の包摂性に吸引されていく「伊豆の踊子」と「白い満月」の主人公の共通したあり方への着目は、この時期の川端康成が創出する幻想性の特徴および問題を明るみに出す端緒となるだろう。⁽⁷⁾さらに、川端康成研究の中で、「孤児根性」の払拭と単純に考えられてきた「伊豆の踊子」をめぐる紋切り型の伝記的な解釈への突破口もまた、「白い満月」における水のイメージの展開との関連性を検討することで、批判的に見出すことができるのではないか。川端康成の初期作品を再解釈する新たな地平は、詳細なテキスト分析を行うことでこそ切り開かれ得るのである。

注

(1) 武田勝彦「『白い満月』」(『川端康成と聖書』教育出版センター、一九七

一・七、一六頁)。

(2) 一柳廣孝「一九二〇年代、〈心霊〉は増殖する」(小松和彦編『日本妖怪学大全』株式会社小学館、二〇〇三・四、五八七頁)、森本穂「魔界の住人川端康成…その生涯と文学上」(勉誠出版、二〇一四・九、二〇七頁)。

(3) 羽鳥徹哉「川端康成と心霊学」(『作家川端の基底』教育出版センター、一九七九・七、三二〇～三一頁)、太田鈴子「川端康成『白い満月』(上)

——描出された美の性格」(『学苑』第五〇五号、一九八二・一、二四二頁)、横路明夫「川端康成『白い満月』論——〈語り手〉とお夏の構造的機能」

(『日本文芸論叢』第七号、一九八九・一〇、九〇頁)、仁平政人「川端康成における心霊学とモダニズム」(坂井セシル等編『川端康成スタディーズ 21世紀に読み継ぐために』笠間書院、二〇一六・一二、九九～一〇五頁)、山中正樹「川端康成と〈心霊学〉——『白い満月』の主題を中心に」(『川端康成——文学の構造と〈美〉の生成』鼎書房、二〇二三・三、三八〇頁)。

(4) 代表的な先行論として、森本穂「愛の呪縛——『抒情歌』の意味するもの」(『川端康成研究叢書補巻』総索引・作品論補説)教育出版センター、一九八三・六、四九～五〇頁)、小林芳仁「心霊学と『抒情歌』」(『美と仏教と児童文学』と『太平洋』、一九八五・二二、一三九～一四〇頁)、三田英彬「『抒情歌』と川端の世界観」(『反近代の文学』泉鏡花・川端康成)おうふう、一九九九・五、三三二頁)、一柳廣孝「異界をまねく——川端康成『抒情歌』の〈香〉から」(『文学』第五卷第五号、二〇〇四・九、一二三頁)が挙げられる。

(5) 橋本治「生という半身を欠いて」(同編『日本幻想文学集成20』川端康成)国書刊行会、一九九三・六、五七頁)、永栄啓伸「『白い満月』私論——切断された時間の彼方」(田村充正等編『川端文学の世界1 その生成』勉誠出版、一九九九・三、一二五頁)、高原英理「編者解説」(同編『川端康成異相短編集』中央公論新社、二〇二二・六、三四七～三四八頁)。

(6) 例えば、近年の仁平政人・原善編『転生』する川端康成I——引用・オマージュの諸相」(『文学通信』二〇二二・一一)、同『転生』する川端

康成Ⅱ——アダプテーションの諸相」(文学通信、二〇二四・四)が牽引

している議論の中では、川端康成の「万物一如・輪廻転生」の思想がアダプテーションやメディアミックスの文脈において捉え直され、積極的な方法論として意味付けられている。

(7) 「白い満月」の物語の舞台である「温泉地」は、作中では匿名にされている。だが、同時期の川端康成のエッセイを参照すれば、伊豆であることと特定できる。例えば、「温泉通信」(『文藝春秋』第三年第五号、一九二五・五、四七〜四九頁)では、「山のせるか雨はよく降る。気まぐれに降る代りに気まぐれに晴れる。午前二時頃に浴室の窓を開くと、雨だと思ふそこに月光が一ぱいだ。白い霧がはにかみながら溪流の上をさまよつてゐる。」という風景描写が見られる。この時期の川端康成が伊豆に長期滞在し、一連のエッセイを書き続けた事実がよく知られているが、これらのエッセイの中で取り上げられている「雨」、月光や「霧」などの描写と、「白い満月」における情景描写は、明らかに対応している。作品の舞台を共有するという点を踏まえて、「白い満月」と「伊豆の踊子」の関連性を指摘することが可能だが、さらに、この二作が『伊豆の踊子』(金星堂、一九二七・三)に初めて収録されたとき、巻頭に「白い満月」、巻末に「伊豆の踊子」が意図的に配置され、対応関係を構成するようになされているという書物のレイアウトからも、両作の強い結びつきを窺える。

(8) 近藤裕子「『伊豆の踊子』論(中)——作品論の可能性」(『東京女子大学日本文学』第五〇号、一九七八・九、四九頁)、田村充正「『伊豆の踊子』試論——虚構のカタルシス」(新谷敬三郎教授古稀記念論文集刊行委員会編『交錯する言語』名著普及会、一九九二・三、五六八頁)、山中正樹「『伊豆の踊子』における〈時間〉と〈語り〉」(『川端康成 生涯と文学の軌跡』鼎書房、二〇二二・一、九三〜九四頁)。

【付記】「白い満月」の本文についての引用は、『川端康成全集 第二巻』(新潮社、一九八〇・一〇)に拠る。なお、引用に際して正字を通行の字体に

適時改め、ルビは省略した。